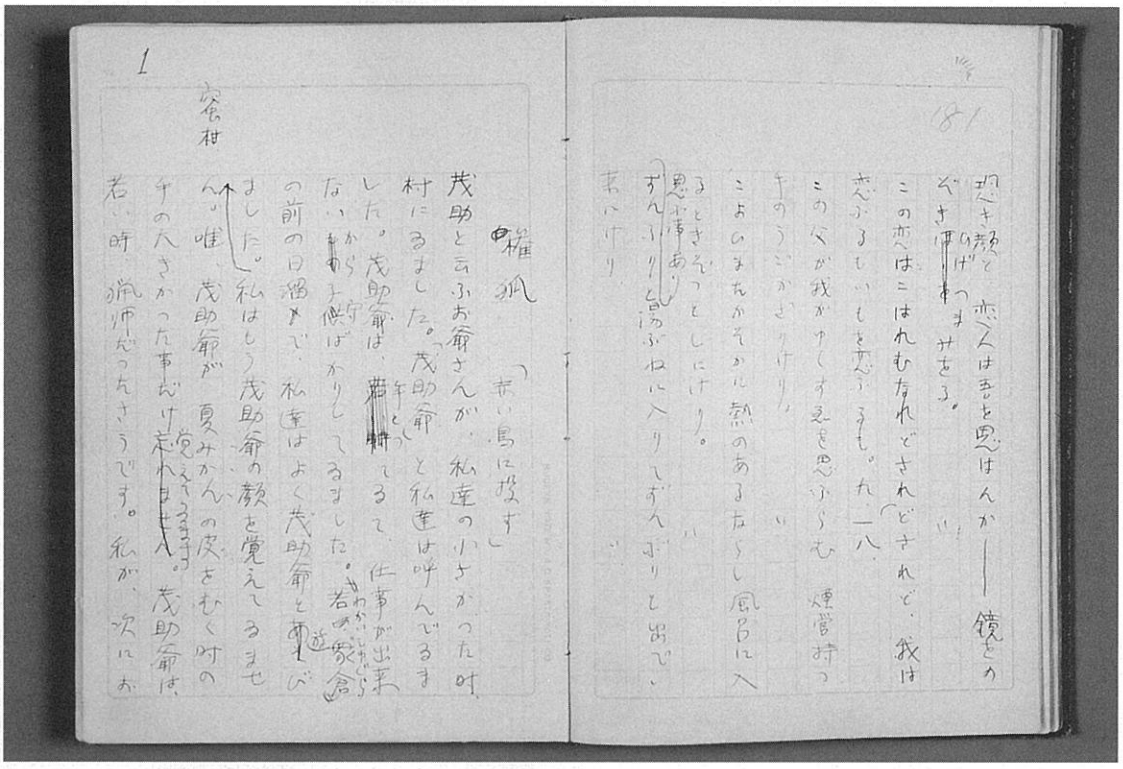
愛知の博物館　No.71



スパルタノート「権狐」　昭和６年　新美南吉記念館蔵

国語の教科書にも採用され、国民的な童話として親しまれている「ごん狐」。しかし、現在読まれている「ごん狐」とは別に、オリジナルの「権狐」があることはあまり知られていない。「ごん狐」が発表されたのは『赤い鳥』昭和７年１月号においてだが、資料は、『赤い鳥』に投稿される前、通称スパルタノートと呼ばれる作品日記に書かれた草稿である。発表されたものと草稿を比較するとかなりの異同があることに気づく。これは『赤い鳥』の主宰者鈴木三重吉が南吉の原稿に補筆をしたからだと考えられている。確かに、三重吉が筆を入れたことで作品としての格調は高くなっている。しかし、草稿「権狐」からは、ふるさと岩滑の土の匂いと、主人公に託した作者の思いがより強く伝わってくる。

目　　次

平成11年度部門別研修会報告

●歴史民俗部門 …… 2

●自然科学部門 …… 3

●美術部門 …… 5

●刊行物のご案内 …… 6

平成11年度　部門別研修会報告

＜歴史民俗部門＞

平成11年度の歴史民俗部門研修会は、平成12年２月17日㈭、名古屋市博物館を会場にして、「博物館におけるコミュニケーション―来館者調査と展示調査―」のテーマで開催しました。

現在、博物館の今後のあり方を求めて、さまざまな試みがおこなわれていますが、そのひとつに、来館者調査と展示評価調査があります。これは、＜人と物とのコミュニケーション＞という博物館の本質が、主要には、展示において追究され具体化することに由来しています。加えて、展示をめぐる配慮と効果を検証する術を、来館者数や図録販売数等以外にもち得てこなかったという現実への反省にもうながされています。

東京都江戸東京博物館では、開館10周年にあたる平成14年度末から平成19年度末にかけて、常設展示のリニューアルを順次実施する予定ですが、それに先立ち、多角的な来館者調査とそれにもとづく展示評価調査を実施（平成９・10年度）し、その成果を公にしました（平成11年度）。今回の研修会は、この調査に携わられた同館学芸員の佐々木秀彦氏と、㈲プランニング・ラボ代表取締役の村井良子氏をお招きし、下記の構成にわたりご報告いただきました。

１．江戸東京博物館における展示評価調査

⑴ 調査のきっかけ

⑵ 調査内容

① 調査の委託

② 調査設計の特徴とその内容／調査対象、調査方法など

⑶ 調査結果

① 来館者像

② 観覧動線の実態

③ 展示評価

④ 来館者の改善要望

⑤ 改善への提言

⑷ 調査の意義

⑸ 改善実施・リニューアル構想の策定

① 短期的対応（改善）

② リニューアル構想

⑹ 今後の課題

２．来館者調査・展示評価調査の方法

⑴ 調査目的とその方法

① 調査目的ー副次的な効果も大

② 調査方法ー予算との絡みで選択、あるものを利用する

③ すぐに・簡単に・低予算でできるおすすめプラン

⑵ 実施時の留意点

① 目的の明確化

② 多面的な視点、分析

③ 継続的な実施

④ フィードバック機構の確立　など

３．博物館におけるコミュニケーション

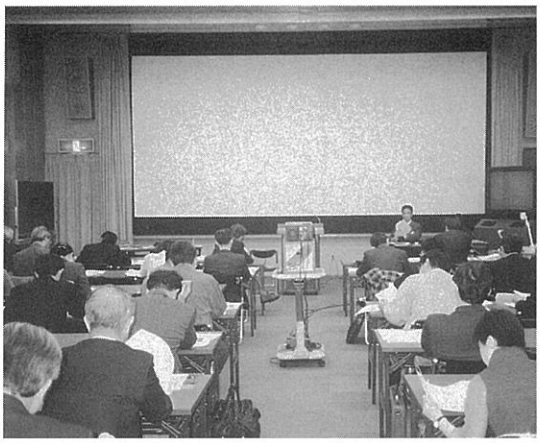
① 展示のコミュニケーション効果を分析できる

② 事業評価のひとつとして活用できる（調査結果から博物館の運営方針や使命などの見直しが可能）

③ 館の活動姿勢を来館者へＰＲできる

④ 館内で働く人たちが目標を共有化できる

⑤ その他



報告に続く意見交換では、リニューアルを控える館園から、より具体的な数値が求められたほか、個別ボランティア問題へと話題が移る場面もありました。

さて、江戸東京博物館の事例は、展示評価調査とは言いつつも、展示の内容やメッセージに及ぶものではなく、現状は「展示ニーズ調査」（村井氏）となっています。しかし、来館者調査⇄展示ニーズ調査／展示評価調査⇄事業（収集保管・調査研究・公開教育）評価⇄方針評価という展望のうちに位置づいていくならば、展示ニーズ調査も優れたプラクティスとなるであろうことが、今回の報告で感じられました。さらに、断片的なアイデアや振興策の総和ではなく、それらを組織する方針が必要であること、そしてここにこそ方針自体が革新されていく理論的・現実的根拠も宿ることが予感できました。

研修会の締めくくりは、昨年10月１日から名古屋市博物館常設展で始まった、ボランティアによる「展示ガイド」と、音声機器による日本語・英語・ハングル・中国語の「音声ガイド」について、同館学芸員の松本博行・加藤和俊両氏から説明を受け、視察を行いました。

【参加者数】

加盟館園 (42)、県内非加盟館園等 (9)、岐阜県 (4)、三重県 (1)、静岡県 (4)、山梨県 (1)、新潟県 (1)、大阪府 (1)、京都府 (1)、山口県 (1)、徳島県 (1)

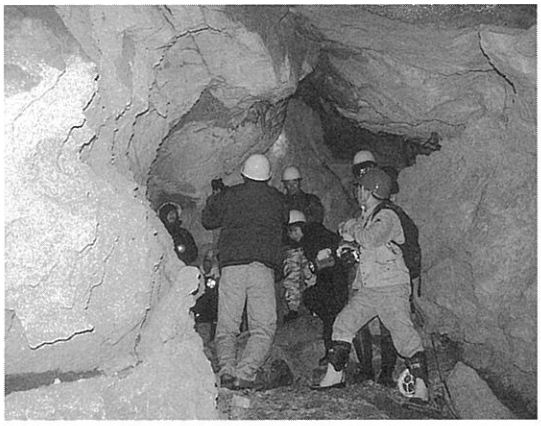
（名古屋市博物館　犬塚康博）

＜自然科学部門＞

平成12年２月10日㈭ 北設楽郡東栄町の「古戸の風穴（ふっとのふうけつ）」において、自然科学部門の研修会が開催され、自然科学系の博物館以外にも他部門の博物館、教育関係者、南山大学の学生さんなど様々な方面から19名の参加者がありました。

今回は普段入ることのできない風穴に長坂輝男氏（故本間静也氏とともにこの風穴を発掘された）の案内で入洞し、洞窟形成物、洞窟内に生息する生物等の観察をしました。

10ヵ所以上もある洞口の中から入洞しやすい入口を選んでいただき入洞したのですが、思っていた以上に内部は狭く、長坂さんを先頭に一人ずつ順番に入洞していきました。

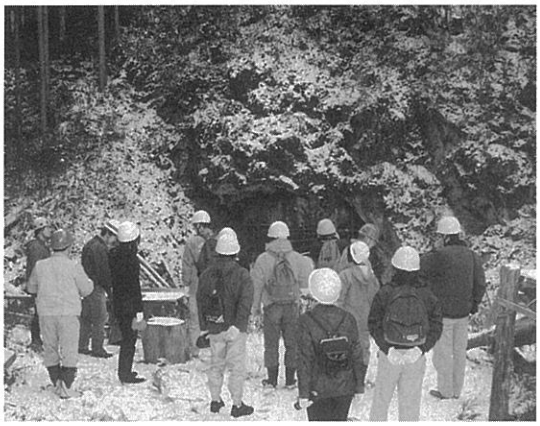


懐中電灯を片手に先へ進むと冬眠中のコウモリが私たちを迎えてくれました。

ここでは豊橋市自然史博物館の長谷川道明氏からコウモリの種類、エサ、天井にぶら下がっているときの体勢などの説明をしていただきました。

この風穴にはキクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、テングコウモリの３種類のコウモリが生息しているそうですが、このうちテン

グコウモリについては日本ではこの風穴だけで冬越冬していることが確認されているそうです。残念ながら今回はキクガシラコウモリにしか出会うことができませんでしたが、動物園などでもあまり出会える機会のない生きたコウモリを間近で見て、触れフィールドワークでしかできない体験をすることができました。

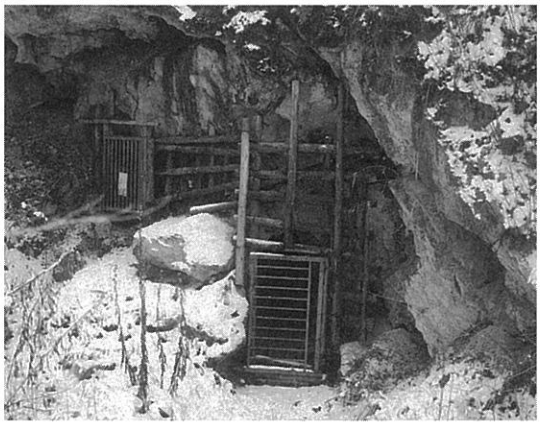


初めに長坂さんよりこの風穴は大変複雑で、上下左右に入り組んでいるというお話があったのですが、その言葉のとおりコウモリや鍾乳石などに見とれながら進んでいくと、自分がどちらから来たのか、どこら辺に居るのか分からなくなってしまうという複雑さで、狭い道が多く、人一人がやっと通れるくらいの広さの所を参加者達が地面に這いつくばりながら先に進んでいくという場面もありました。

今回は長坂さんのご好意で埋蔵した洞窟がどのように発掘されたかも体験させていただくことができました。入口付近の、外から土が入り込むような所は土が固く発掘作業も大変だったということです。私達が掘らしていただいた風穴の奥の方は、サバ土のような柔らかい土がたまっており簡単に掘ることはできるのですが、道が狭いため洞外に土を運び出す作業は大変でした。参加者全員でバケツリレーをして土や石を運び出したのですが、大きく重い石も多く翌日筋肉痛になった人も多かったのではないでしょうか。

土を掘り出す作業は無理な体勢で行うため1日に4時間くらい作業するのがやっとだったということです。私達参加者はほんの数十分だけですが、当時の苦労を体験することができ、この風穴にますます興味を持つことができたと思います。

その後、集合場所でもある千代姫荘に戻り、まとめとして、鳳来寺山自然科学博物館の加藤貞亨氏による風穴内に生えていたキノコについて、同じく鳳来寺山自然科学博物館の横山良哲氏による奥三河の鉱物と岩石についての説明がありました。



以上が今回の研修会の報告になりますが、私自身今回初めて参加させていただいたのですが、様々な分野の専門家についていただき観察することが、こんなにも楽しいことだとは思ってもみませんでした。

観察場所の選定をはじめ自然観察会には準備する側にとって難しい面が多々あると思いますが、この感動を多くの人に伝えられるよう、今回の研修会を参考に今後努力していけたらと思います。

この研修会のご準備ご配慮していただいた方々に感謝申し上げます。

（日本モンキーセンター　山内志乃）

＜美術部門＞

去る平成12年２月24日、愛知県美術館にて「美術館危機の時代＜不況対策＞」をテーマに美術部門研修会が開催されました。

最初に名古屋市美術館の神谷学芸主査から、広報についてこれまでの経験と実績に基づいた貴重な秘策が披露されました。利用者の減少傾向のみられる近年、いかに‘人’を惹きつけ呼び寄せるか。そのために、対象層をどこに設定すると効果的になるかという、企画に合わせた具体的な活動についてでした。企画によっては、マスコミとのタイアップや関係のありそうな各諸団体・協会などへの協力要請、ポスターなどの発送先など、ターゲットを明確にした相乗効果を見込む。特に、ポスターなどを見て知っていてもこない人に対し誘致することは、利用者の減少に歯止めをかける重要な鍵であると。他にも、時間や労力を費やして工夫を凝らした手法、無料で情報を流してくれる媒体への情報提供など。これらの事例は館ごとの差違はあれど今回の発表に共通した内容でした。

神谷学芸主査からの事例報告が会場の外にむけた発信という方法に対して、愛知県美術館の村田主任学芸員からは会場の中からの発信ということであったように感じます。展示品を飾ることに加え、初心者という立場に今一度戻り、一人一人の疑問に対して細かな配慮をすることによるサービスの向上、「口コミ」というかたちで人が人を呼びよせる宣伝効果を実感したという事例の発表でした。わかりやすい宣伝や解説、文字の大きさなどにいたるまでの気配り、会期中にも展示室に足を運ぶことで、ひとりでも多くの人に企画の意図や作家についての理解を深め充足感を与えられるようにすること。企業や店舗で顧客獲得のための努力を参考にみえてくるものに学び、時代の要求に呼応していくことも必要であるということでした。

また、徳川美術館の小池普及課長とメナード美術館の吉岡課長からの報告には、私立ならではの工夫や手段、アイデアの活用という公立にはない融通の利いたサービスを実施することにも目をむけられているという感想を持ちました。予算に頼らず、イベントなどはわずかでも参加者に負担を課し継続的に行えるようにし、印象づけられるような活動をするなど話題を提供し、恒例行事とすることで、固定客の確保が可能であるという、時間と知恵を活かした努力の成果が発表されました。

加えて、稲沢市荻須記念美術館の山田学芸員からは、限られた枠を少しでも広げるため規模の同じような館との共同企画における可能性についての発表がありました。また、助成金や補助金等の援助を受けることで、財政負担の軽減だけでなく、活動報告のアピールとしても事業を円滑に進めていく手段の一つとなりうること。人や組織を繋げ「輪」を形成することで可能性を膨らませられた内容でした。

今回特別講師としてお招きした企業メセナ協議会専務理事の根本長兵衛氏からは、「理念先行」―つまり目標を正確に定め具体的なプランを作成しそれに基づき行動をすること。目標を定めようとすれば、日本における文化的成熟度の低さを認識することになる。今後日本が文化国家として再スタートするためには、社会全体が芸術を生み出すのも育てるのも‘人’であることの

認識を持たねばならない。芸術文化の精神的価値観の向上をはかるために、今こそ真剣に取り組む時期にきているとの警鐘が鳴らされました。

この研修会で、これまで美術館（送る側）が主体としての活動から、これからは来館者（受ける側）が主体となる方向に重点を移行した時代の要求が浮き彫りにされてきたように感じました。予算削減も本質を見極めるための自然淘汰と考え、アイディア次第で可能性があると前向きに考えてみることも大事なことかもしれません。芸術というものを一人でも多くの人の目や心に触れられる活動をするために、事業自体を再考する機会として学ぶことのできた有意義な研修会でありました。

（尾西市三岸節子記念美術館　吉安　恵子）

刊行物のご案内

『平成９年度 愛知県博物館協会歴史民俗部門研修会の記録 活きている博物館 ～歴史系博物館のこれから～』

平成９年度愛知県博物館協会歴史民俗部門研修会の記録集ができあがりました。

平成10年２月、一宮市博物館を会場にしておこなったこの研修会は、ユニークな活動を行っている愛知・岐阜・三重・静岡県の博物館学芸員をお招きし、博物館教育、コンピュータ利用、友の会、移動博物館等のテーマにわたってレポートしていただきましたが、本書はその記録です。

また、この研修会にともない実施した、県下の博物館職員対象のアンケート調査のデータも掲載しました。これは、これまでの活動を顧みつつ、今後の博物館活動の方向性を示す貴重なデータとなっています。

今年度の歴史民俗部門・美術部門研修会参加の加盟館園には手渡しで、それ以外の加盟館園には郵送で納本いたしましたが、非加盟館園・個人で購読希望の方には、１部1000円（郵送料１部310円）でお分けいたします。愛知県博物館協会事務局までお申し込み・お問い合わせください。

【内　容】

はじめに

基調報告　犬塚康博（名古屋市博物館学芸員）

学芸員奮闘記―悪戦苦闘!!私たちのン10年―

　水野　礼子（日本モンキーセンター学芸員）

　野尻佳与子（内藤記念くすり博物館学芸員）

　加藤　貞亨（鳳来寺山自然科学博物館学芸員）

　佐藤　拓伸（浜松市博物館学芸員）

　野村　史隆（海の博物館学芸員）

レジュメ集

ココロのアンケート

　博物館員調査ノススメ　犬塚康博

　アンケート集計結果

付　録

平成10年度東海地区博物館連絡協議会・講演

　博物館における市民参加

　那須　孝悌（大阪市立自然史博物館館長）

あとがき

〔128ページ、Ａ４判、並製〕

お知らせ

愛知県博物館協会事務局館の変更

・11年度　愛知県陶磁資料館

・12年度　名古屋市博物館

「愛知の博物館」　No.71

発行日　平成12年３月

編集・発行　愛知県博物館協会

〒489-0965　愛知県瀬戸市南山口町234番地
愛知県陶磁資料館内

TEL（0561）84－7474
FAX（0561）84－4932